



## 冬場の乾燥

早いもので、今年も残すところ10日ほどとなりました。空気の乾燥が気になってくる時期ですね。さて、天気予報などを見ていて、「冬場は乾燥する」と言うけれど、湿度は夏とほとんど変わっていないことに疑問を持ったことがある方も多いのではないでしょうか。

そこで今回は、季節と湿度の関係性について見ていきたいと思います。

図1は、2017年始から2019年末までの3年間の湿度推移（京都市）です。この図を見る限り、冬場だからといって相対湿度は低くなっていないようです。

図1 京都市の相対湿度の推移（7日間平均）

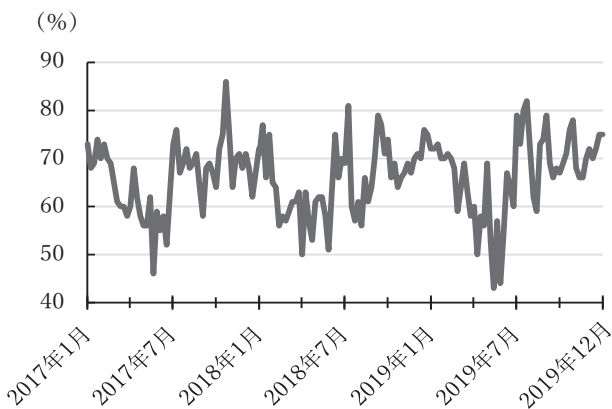


図2 相対湿度及び気温の推移（7日間平均）

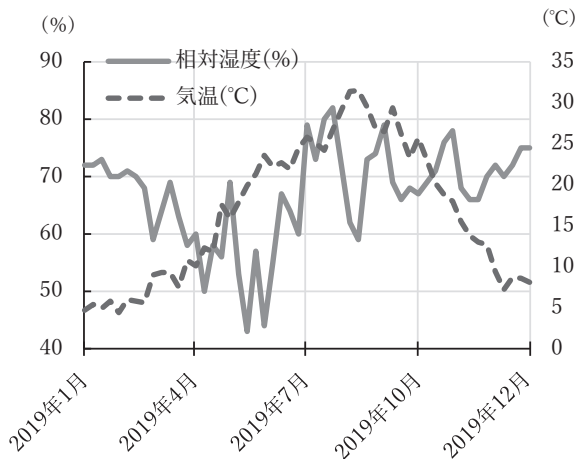
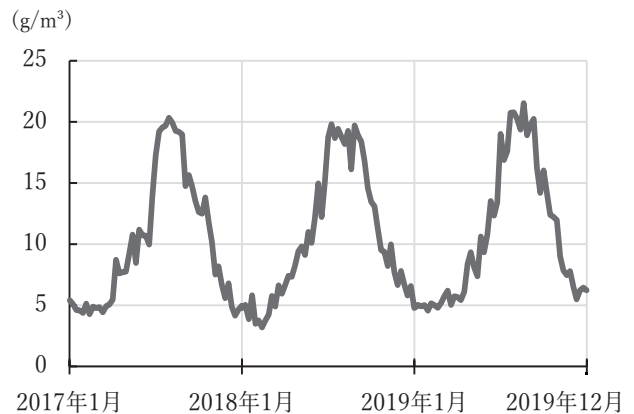


図2に示されるように、相対湿度は気温とも無関係であるように見受けられます。

では、なぜ、一般に冬場は乾燥するとされ、また実際にそのように感じるのでしょうか？その答えは、大気中に存在する水蒸気量にあります。いわゆる「湿度」とは、「その日の水蒸気圧」÷「その日の飽和水蒸気圧」により算出される相対湿度です。気温が低くなると飽和水蒸気圧及び飽和水蒸気量が小さくなり、同じ湿度でも大気中の水蒸気圧と水蒸気量は少なくなります。

図1のデータを基に、各日の気温データを用いて大気に含まれる水蒸気量の推移を計算すると、図3の結果が得られます。

図3 大気中の水蒸気量の推移（7日間平均）



相対湿度は気温と無関係に推移していましたが、大気中の水蒸気量は気温が低くなればなるほど少なくなる関係にあることが見てとれます。

冬場は夏と比較して、同じような相対湿度でも大気中の水蒸気量は1/4程という乾いた状態にあることがわかりました。これからしばらく乾燥が続きますので、お部屋の湿度などにもご注意ください。

資料：気象庁「過去の気象データ」

(<http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/index.php>)、

「京都市7日間平均気温・7日間平均相対湿度」